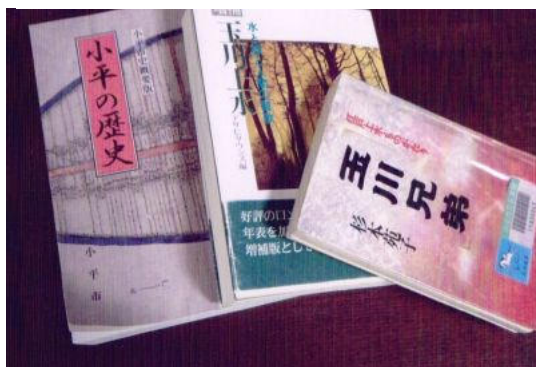


－玉川上水と玉川兄弟(1)－

(記 岡本)

1. はじめに

1603年徳川家康が征夷大将軍となり、江戸に幕府を開いた。三代将軍家光の代に参勤交代制が確立し、諸国二百数十の大名と家臣が江戸に屋敷を構え、それに伴い商人、職人も江戸に集住した。そして江戸の人口が急増、このため神田上水、赤坂の溜池の湧水、市中の井戸水だけでは飲料水が不足しだした。そして四代家綱の代に多摩川の水を水源とすると玉川上水が開削された。



幕府は1653年1月玉川上水開削を決定し、総奉行に老中松平伊豆守信綱(川越藩主)、玉川上水奉行に伊奈半十郎(関東郡代)を任じ、兄庄右衛門、弟静右衛門兄弟に工事請負方を命じた。

同年4月に着工し、8ヶ月後の11月(閏年で6月が2回)に羽村(羽村市)－四谷大木戸(新宿御苑付近)の間、約43キロの上水路が完工した。上水開削の功により兄弟は玉川の苗字と帯刀を許され上水役を命じられた。

玉川上水は17世紀半ばから310年間(1965年、昭和40年3月まで)、江戸、東京の住民に命の素、飲料水を供給し続けた。

何度か玉川上水縁(へり)を散策するうちに、上水への関心が募り、関連の書籍を読むことになった。幕府からの資金では不足、私財を投じて完工させた兄弟とはどんな人物なのか、まず関心の先は玉川兄弟に、次に上水の突貫工事、上水の管理、上水の利用、上水の現状などに広がっていった。



現在の玉川の流れ

玉川上水関連の歴史的史料は、極めて少ないという。関連の主な書籍は、「上水記」(注1)と「玉川上水起元」(注2)の史料に基づいて書かれるのだが、両史料は開削後140年後に書かれたものである。開削当時の史料がないのが実情であるため、工事の発議、着工の経緯、二度の工事失敗を含む工事の進捗、玉川兄弟の素性、私財を投じて資金を補填したことについても詳細は不明であるという。更に、老中松平信綱の家臣安松金右衛門の設計説を取る向きも多いとも言われている。いずれも、断定的に記述されておらず、「～といわれている」とか「～みられる」という、なんともスッキリしないことが多い(注3)。

(注1)「上水記」1791年に普請奉行上水道方が神田上水、玉川上水の維持管理のために書いた役所の資料。工事の技術面には直接触れていない。上水の概要や水銀徴収、水量調節、水番人、玉川上水の分水路、上水持場、羽村取水堰付近図などが書かれている。

(注2)「玉川上水起元」1803年に普請奉行から老中への報告書で開削の起元、分水について記さ

れている。ここには、工事は二度失敗し、松平信綱の家臣で野火止用水の開削者安松金右衛門の設計により羽村に取水堰を決定し、上水の成功に導いたと記されている。

- (注3) 杉本苑子は歴史小説「玉川兄弟」のあとがきで「根本資料のように受けとられている「上水記」も完成後の上水路の維持、管理の必要上担当官庁の奉行所で編纂されたため直接工事そのものに触れていない」「開削を発議し、許可した閣僚の氏名、玉川家で後にトラブルが起こった際、子孫が提出した書き上げがわずかに類推の手がかりになる程度」「どういうやり方で測ったのか、掘ったのか…具体的には一切不明でした」「途上で一、二度失敗したらしいといわれるものの、それを裏付けるに足る質の良い史料はありません」他方「こうした史料的な自由さ故に、ある意味で小説化しやすい素材とも言えます」と書いている。

参考資料

- (1)「小平の歴史 小平市史概要版」小平市 平成27年刊
- (2)「玉川兄弟」 杉本苑子 朝日新聞社 昭和49年刊
- (3)「玉川上水 水と緑と人間の賛歌」 アサヒタウンズ編 けやき出版 平成3年刊
- (4) ウィキペディア 玉川上水
- (5) 東京水道局広報資料

2. 玉川兄弟

(玉川兄弟の素性)

玉川兄弟の生年、没年、姓名、出身地、経歴など履歴書に記載すべき基本情報はどうかろう。生年は不明である。没年は兄1695年6月6日、弟1696年5月5日という。上水完成後、40年後に没している。何歳で没したかわかっておれば、当然に生年もわかるはずだし、墓碑には生没年を刻むだろうに生年が不明なのは不可解である。



出身地や素性についても、曖昧である。「多摩川中流部の事情に詳しい多摩地域の百姓とも、江戸町人ともいわれている」との記述が主である。史料的には江戸芝辺りの町人(「徳川実記」1844年完)、江戸在住者(「新編武蔵風土記稿」1830年完)、江戸深川の町人(「武蔵名勝図譜」1823年完)という見方がある。幕府の大規模工事を請け負う程の人物なら多摩の田舎の在住者ではなく、江戸在住の他の同業者より秀でた土木技術、財力をもつ業者であったと考えるべきであろう。他方で、多摩川や武蔵野台地の地形にも精通した者であると考えるならば、多摩地域出身で江戸在住の土木業者と想定することができよう。参考資料(3)には、羽村出身の作家中里介山(「大菩薩峠」の作者)の母ハナの生家である羽村の加藤家の文書に、兄弟は羽村出身で父は加藤八郎右衛門とあると

言う。作家杉本は小説の中で兄弟を羽村出身で姓を加藤としている。

同じ参考資料(3)は兄庄右衛門の14代目の直系子孫にあると称する玉川雅子に触れている。玉川女史は昭和61年8月27日に行われた玉川上水清流復活セレモニーに招かれ通水ボタンを押したと記している。そして玉川女史は「自分から名乗ったことはないのですが、系譜や宮内省から頂いた従五位の位記が残っております」「子供の頃住んでいた赤坂見附の家には玉川稲荷が祀ってあった。」「父13代目(昭和38年没)から初代玉川兄弟は、福生の庄屋の息子で福多という姓で現在の福生市役所辺りに屋敷があったと聞いている」と述べているという。

更に参考資料(3)には、私家に伝わる系図だから真偽の程は判らないがとして、その系図に「福多帯刀ノ儀ハ 水戸殿家臣タリシ中 祖父親次 飲料水ノタメ 玉川水道掘割ニ 際シ 尽力其効不尠 其后故アツテ 水家浪人シ…」とある。文中の「その後故あって水家浪人し」とあるのは、三代玉川庄右衛門の代に上水役の立場を利用して武家や町人から賄賂を取って水の分け方に手加減したという噂が広まり諸権利を1739年に剥奪されたことを指す。このため福多の姓に戻していたが、東京の水道開発の功ありと認められ、明治44年(1911年)に宮内省より従五位を追贈され玉川姓も復活したらしいとある。

玉川兄弟が上水を完成した後、幕府から受けた処遇を概略する。兄弟は1654年6月に上水開削の功により苗字(玉川)帯刀を許され、上水役を命じられる。また4年間にわたり200石分の扶持を与えられた。当時、上水工事をした者は上水役を命じられるのが普通で、その役は永代である。兄弟は羽村大堰の修復工事を担うことになるが、手当不足を嘆願し、1659年から上水を利用する武家(石高割)や町方(小間割)から水上修復料銀(水道料金)の取り立てを許された。その後前述の収賄事件で玉川姓、上水役、料銀取り立て権を幕府に返上させられた。

(玉川兄弟の土木修業)

玉川兄弟が江戸市中の同業者を排して上水工事を請け負えるほどの土木、測量などの技量をどのように取得したのだろうか。そこら辺を書いた史料はないらしい。



現在の羽村取水口

参考資料(2)の歴史小説「玉川兄弟」で杉本苑子は、兄弟は羽村の大百姓加藤家の次男三男で16歳で江戸に出て大枅屋嘉兵衛の膝下で修業し技術を学んで一本立ちした。屋号も大枅屋の分家ということから枅屋を許されたとしている。

参考資料(2)では更に、上水工事の頃は兄31歳、弟24歳という設定である。業者内の格付けは中堅だが、仕事師の技量は抜群で兄の人柄は包容力ある重厚、穏和、弟は兄と反対で任侠肌で仕事は割元(人足などの口入れ家業)で人集めの手腕は冴えているとしている。任侠の幡随院長兵衛も割元の出である。割元には男伊達、任侠の要素が絡む。

兄弟はどんな思惑で工事を請け負ったのか、参考資料(2)では、最初は工事で大儲けできると欲と名声に駆られて工事に取り掛かるが、失敗や苦労を重ねる間に、江戸市中に送水し住民の生活を楽にするのだという純粋な気持ちに燃えていく、そして私財を投じて完成させることになったとしている。

(次回以降玉川上水の開削、管理、利用、今の玉川上水、小平の開拓などが続く)